

人間性の深み シュワイツァー と内村鑑三

私がシュワイツァーに出会ったのは、野村実先生の『人間シュヴァイツェル』（1955年8月刊）においてであった。買い求めたばかりのこの本を、北海道への夜汽車の中で読みふけたことを覚えている。その前年ランバレネに博士を訪ね、彼の病院で5か月にわたって働いてこられた先生は、この小冊の中に、シュワイツァーの「豊かな人間性」を見事に描き出しておられる。

どこを開いても感動的だが、中に次のようなさりげない一節がある。

博士は灯もなしに、バッハのフーガに余念がない。外は月夜だが、初めて入る室内は暗くて進めない。博士はそれと気付くと弾く手を休め、私の手をとって同じ腰かけに並んでかけさせた。再び沈黙の演奏がつづいた。

この美しい一幅の絵は、いつも私に『生い立ちの記』の中の、あの「薄暗がりのなかで、いなくまに照し出されたように、わたしたちのそばに道づれのいることがわかる一瞬」を思い起させる。人生の「出会い」とは、このようなこと言うのであろうか。

実は私はちょうど同じところに、信仰の恩師を通して内村鑑三にも出会ったのであった。内村に『代表的日本人』という著書があるが、そこで彼は西郷隆盛を論じて、次のようなエピソードを伝えている。

彼が衷心からきらったのは、他人の平和を

乱すことだった。人の家をたずねても、声をかけて中の人を呼びたてるようなことをせず、そのまま玄関にたたずんで、誰かがひょっこり現われて自分に気付くの待っていたという。

この西郷評は、そのまま「人間内村鑑三」であると言ってしまうであろう。この内村が

わたしたちがたがいに神秘であるというこの事実を、わたしたちはそのまま受け入れなければならない。

人は他人の本質のなかへはいりこもうとすべきではない。他人の精神的本質にたいして畏敬の念をいただくだけが、ほんとうに他人に感化をおよぼしうるのである。（『生い立ちの記』）

というシュワイツァーの言葉を読めば、きっと「グレート！」と叫ぶにちがいない。

事実、内村は日本で最も早くシュワイツァーを知ったひとりであった。彼はその晩年博士の『キリスト教と世界宗教』を読んで、「大きなインスピレーションとアドミレーションをもった」という。その後も『文化哲学』2巻を読み、自分の聖書研究会の会員に勧めて寄付金を募り、再々博士のもとに送っている。偉人は偉人を知ると言うべきか、このふたりの偉大な人格は、その「精神的本質」において互いにふかく共鳴しあうものをもっていたのであろう。

内村は西郷を「最も孤独な人」と評したが、彼じしんが孤独の人であった。「単独の勢力」

に恃んで、ひたすらに「十字架^{ぎょうたん}仰瞻の福音」を宣べ伝えた。そしてシュワイツァーもまた「ひとりで歩いた人」であった（野村実「ひとりで歩いたシュワイツァー」）。「主のめくばせに従って」、独り黙々とランバレネへの道を歩きつづけた。

故郷ギュンズバッハの教会で、自ら設計し、その制作を指導したという愛用のオルガンを弾くシュワイツァーの写真がある。その横顔に、内村の横顔が驚くほどよく似ている。いずれも厳しく、力強い。「真理に従う力」（第1コリント23・8）の表現であろうが、同時に両者の影姿には、独り立つ人の寂しさが色濃く漂っているのも感じないわけにはいかない。真理に生きる人の悲哀なのであろうか。かれらの主が「悲しみの人」であられたように。

博士はこのオルガンでバッハを弾く。バッハの国人のひとりが内村の『英和独語集』を読んで、「この書を読むは、バッハの音楽を聞くようであった」と言ったというが、オルガンを弾かない内村は、ペンをもってバッハを弾くのである。

唯一の頼りは完全の人イエスである。少しなりとも彼に似んことが、わが最大の努力であらねばならぬ。信者と呼ばれずともよい。しかり、「信者」でない方がよい。心柔和にして謙遜者となりて、わが心に平安をうればよい。人生の終りに近づいて、キリスト教とキリスト信者とがだんだんといやになりて、ナザレのイエスのみが慕わしくなる。あるいはイエスに依るヒューマニタリヤン（人道教信者）として死ぬのかも

知れない。

（死の5か月前の日記）

こうして、「強靱な精神と優しい心」（M・L・キングの説教の題）に恵まれた二人の偉大な魂は、妙なるデュエットを奏でて、私どもを人間性の深みへといざなってくれるように思われる。

（所載）

『ランバレネ』第100号

シュワイツァー日本友の会

1987年3月